

時評

佐藤洋一郎 総合地球環境学
研究所教授

先日、久しぶりに、雨季のラオス首都ビエンチャンを訪ねた。今年のインドシナは雨が多いと聞いていたが、なるほど雨ばかり。町の南を流れるメコン川の水位も上り、堤防の一層ほどのところまで赤茶色の水が来ている。川面には、上流から流



れてきた、木っ端やごみが汚らしく無数に浮かび、すごいスピードで下流に流れてゆく。人々はそれでもどこかのんきで、川に面したほうの堤防の斜面にはたくさん屋根が出てにぎわっていた。

私たちが出国する前日には水

雨季のビエンチャン

位がさらに上り、過去四十年で最高値に達していた。こうなるさすがに町の様子が違ってくる。砂を満載したダンプカーがうなりをあげて走り回っている。堤防の下には多くの人々が集まり、砂を袋に詰めて土嚢をつくり土手の上に積み上げ始め

(一九六六年)のときには川のよ

うになった道路でみな魚とりに

興じたものだ。と涼しげな表情

で話す人々がいた。洪水は悪い

ことだらけ、というわけでもな

く、少しはよいこともある、と

彼らは考えているようだった。

巨大土木工事を施して水を完

全にコントロールしたつもり

の

川は赤い濁流と化し、所どころ

で周囲の土地にも流れこんで、

水溜りを作っていた。それは巨

大な竜が寝返りを打つ姿にもみ

えた。この人々はこの暴れ竜

とつきあってきたのだ。

自然に添って生きる人々

ている。旅行社のガイド氏によると、何十きか上流の彼の村付近では土地が低いため水が堤防を越えて田に流れ込んでいます。

しかしその顔に悲壮な感じはあまりない。ビエンチャンの市内でも、これは困ったという顔をする人と、前回の記録的洪水

つたん洪水が来ると甚大な被害が発生し、水がひいた後も農業被害はじめさまさまな被害に苦しみ、伝染病の発生に気を遣うなど、よいことは何一つない日本とはずいぶん違っている。

帰途、私たちの飛行機はメコン川の上で大きく旋回し、川の様子を手取るようにみえた。

べもなく多くを失い、その責任を誰かに科そうと考える。かの地の人々にそうした心情がないとはいわれないが、彼らはこの暴れ竜につきあい、水がない時にはないの、ある時にはあるのりの対応をしてきた。自然に添うとはこのような生き方をいうのだと思う。

私たちは日本人は、いったんそのコントロールを失うとなす

さとう・よういちろう氏 京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2003年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」(角川書店)「DNA考古学のすすめ」(丸善ライブラリー)など。